2023

LA NOUVELLE

No.30
PRINTEMPS

東京外語仏友会
〒113-0033 東京都文京区本郷 2-14-10
本郷サテライト 東京外語会気付
発行責任者　藤倉洋一（1970/ 昭 45）
2023.4.1 発行

第 27 回サロン仏友会

11 月 27 日（日）、サロン仏友会を会場参加とオンライン参加のハイブリッド形式で実施した。会場の大手町サンケイプラザには 34 名の会員が集結。オンラインでは 24 名が視聴した。

鈴木洋美幹事（1991）の司会で、金澤会長代行 (1968) が開会の挨拶を行った。続いて、6 月に東京外語会理事長に就任された寺田朗子氏（1975）より外語会への寄付協力への呼びかけがあった。

次に帝京大学教授の渡邊啓貴氏（1978）が登場。演題は、「マクロン第二期政権下のフランス」。講演開始前に、国際情勢に関する渡邊氏の執筆記事コピーも配布され、会場参加者からは「フランスの政治情勢を知る上でとても参考になり、一層興味が出ました」など、好評だった。内容については、講師本人によるまとめ記事（次項）を参照されたい。

講演終了後、会場参加者一同で集合写真を撮影した。オンライン参加者の視聴は、時間配分の関係でここまでで終了とさせていただいた。

その後は、お待ちかねの懇親会。円安でボジョレ・ヌヴォの価格が高騰したため購入本数を通常の半分に抑え、残り半分はより安価なコート・デュ・ローヌのワインに切り替えて節約した。会場参加費については、本郷サテライトでの飲食が不可能になったことに伴い、外部施設を利用せざるを得なくなったため 6000 円とさせていただいた。終了後のアンケート結果を見ると、「やはりライブは良いなと実感しました」など、ほとんどの参加者にご満足いただけたようで、うれしい。春の仏友会総会では、さらに多くの会員が対面で歓談できるようになることを期待している。

（幹事　中村日出男記）

フランス政治を通してデモクラシーを考える

渡邊啓貴（1978/ 昭 53）

わたしが初めてルペン率いる極右「国民戦線 (FN、現国民連合 RN の前身)」について小稿を書いたのは 1979 年の時だった。欧州議会選挙が比例代表・直接投票制度で初めて実施されるため極右勢力が伸びるのではないかという事前予測に関する論考であった。実際には FN は候補者リストも作成できず、泡沫政党のままとなった。

しかし結党からちょうど 50 年の昨年、決選投票まで残ったマリーヌ・ルペン (創設者ジャン・マリ・ルペンの三女) 候補は 41％を獲得、前回 2017 年の決選投票の 34％から勢力拡大に成功、6 月国民議会選挙 (総選挙) ではそれまでの 1 議席から 89 議席 (全 577 議席) へと飛躍を遂げた。単独政党としては議会最大勢力を誇り、議員立法案提出権を有し、議決に大きな影響力を持つ政党にまで育った。

講演中の渡邊啓貴先生

80 年代半ば当時演説会場に行くと戦闘服の青年集団と白人男性を中心とする聴衆に向かってルペン党首が大声で有色人種に対する批判をしていた。後列で聞いていた私は我知らず会場の出口付近にまで後ずさりしていた。しかし今やアラブ系の党員を含み、夫婦連れも多いので聴衆の半分は女性である。そしてマリーヌ党首は言葉巧みに「共和主義」「デモクラシー」を連呼する。

ルペンの躍進は政情の不安定とも結びついている。マクロン与党は中道派を中心に左右が半ば野合した集団だ。したがってマクロン人気の一方で組織的・思想的な団結に欠ける。他方で、伝統的な左右両勢力は決め手を欠く。左右イデオロギー対立を反映した政党地図は崩れかけているが、かといって中道主義が定着したともいえない。20 年前に大統領選挙とほぼ同時期に総選挙を行うことで安定多数派の定着を意図した選挙制度改革が行われたが、今回の総選挙では初めて大統領与党が単独過半数を得られなかった。つまり議会で政府案を可決するにはほかの政党との協力が不可欠となったのである。昨夏の世論調査では国民の 83％が「大統領は弱体化した」と考えた。実際メランション率いる極左「不服従のフランス (LFI)」を中心とする野党左派連合は議会の財務委員長のポストを得、RN は 6 人の副議長のうち 2 人を占めた。

絶対過半数を持たないマクロン政権の舵取りは、ケースバイケースの多数派形成を強いられ、不安定だ。マクロン派は LFI や RN とは組めない。そうなると、議席 61 名にまで後退した保守党 (シラク・サルコジ大統領を輩出した旧ドゴール派) に頼るしかない。保守党がキャスティングボートを握る不安定な議会運営をマクロンは強いられている。

昨年の大統領選挙では購買力が最大の争点だった。新政権発足後その議論が最優先され、購買力法案は 8 月上旬議会を通過した (「マクロン手当」と呼ばれる、非課税・社会保険料免除の特別賞与の上限を引き上げる時限措置)。この時保守野党の共和党とともに極右 RN も賛成票を投じた。中道・保守派と極右の協力だった。これまでにない新しいパターンの出現だった。

もう一つの大きな課題はマクロン政権発足以来の最大の課題、年金積立期間の延長 (現行 62 歳を 64 歳へ) だったが、それはいよいよマクロン第二期政権の政治生命をかけた戦いの段階に入っている。年末以後公共交通ストや大規模の街頭デモが行われ、マクロン政権への圧力は大きい。かつてシラク大統領時代ジュペ政府は社会の圧力から法案を撤回した。年金改革は歴代政権の鬼門だ。街頭行動による反政府抗議運動は欧州・フランスにおいて依然として有効だ。

翻って我が国では政権は一見安定している。圧倒的な自民党政権への支持率だ。欧州でデモやストライキが盛んになると、欧州デモクラシーの危機だと騒がれる。そうしたときメディアの方から「安定している日本の政治の方がデモクラシーとしては発展しているのではないか」、と聞かれることがある。多党分立政治では政局は動揺しやすい。街頭行動や移民流入で社会は動揺する。しかしいずれもそれらはデモクラシーだからこそだ。極右の主張を支持するつもりはないが、そうした極端な主張も言論の自由ではある。また権利の証しとしての直接行動はデモクラシーであり、デモクラシーであるからこそ苦しい内情を抱えつつも、国を閉ざさない。外国人を受け入れる。発言が自由で外に開き、平等の権利を保障すること、そのことがなかなか日本社会では根付かない。「同調圧力」などという言葉がまことしやかに市民権を持つ。語らぬ閉じた社会に慣れてしまうのもこの国民の習性だ。デモクラシーは戦い取るものであるはずだ。40 年以上フランス政治をウォッチしてきた後で日本へのメッセージがこれに尽きるとすれば淋しい。

サロン仏友会会場に直接参加した会員の皆さん

入学した 1970 年

森田秀二（1975/ 昭 50）

私が入学した年、授業は紛争の影響で 2 ヶ月遅れで始まった。当時のフランス語科の新入生は文字を介さない音声と絵（コマ）だけのクレディフ・メソッド（Voix et images de France, 1962）によりフランス語の洗礼を受けることになっていた。コマを見ながら、音質最悪の録音テープを何度も聞いては口真似する。私のように凡庸な言語耳の持ち主にとっては極めて効率が悪いメソッドなのだが、当時は面食らいながらも素直に口真似を続けていた。だが、パブロフの犬みたいに（視覚）刺激に自ずと条件反射（誕ならぬ音声分泌）するオートマチズムが身に付いたとはとても言えない。

それにしても不思議なメソッドである。第 1 課は Voilà monsieur Thibaut. という若い女性の声で始まり、続くコマでは姿を見せたその女性が、Vous êtes monsieur Thibaut ? と問う（知ってるのになぜ聞くの、とちびまる子ちゃんならチャチャを入れるところ）。Thibaut 夫妻を座らせた後で、女性はいきなりこちら（カメラの方）を向いて Je vous présente monsieur Thibaut. と続ける（一体あなたは語り手なの登場人物なの、どっちなの）。後年パリで観たイヨネスコの『禿の女歌手』を思わせるシュールぶりだ。

それに比べると同じクレディフでも後輩たちの代で使われ始めたメソッド（De vive voix, 1972）にはリアリティがあり絵もカラーである。第 1 課（Pierre et Mireille font connaissance.）では、路上で足を痛めた Mireille が停めたタクシーに、あろうことか初対面の Pierre がそのまま付き添って乗り込む。きっかけのやりとり（P: Vous avez mal ? M: Oui, j'ai mal. P: Je viens avec vous.）で Pierre に邪な魂胆がないことはわかるのだが、学習者はこの二人いずれ絶対にデキると確信する。

カラーとロマンに欠ける Voix et images で私の耳に今でも残る音の連なりがある。例えばオニュメロディス。絵に数字の 10 があるのでディスは分節できるが、オニュメロという喉の奥から押し出されるニョロッとした塊は不可解そのものだった。それでもとにかく素直な私はオニュメロを念仏のように唱えた。これが au numéro であることが判明するのはずっと後のことである。プラスディタリも数年後のパリ留学中、当時住んでいた国際学生都市から出ていた市内バス 21 番のアナウンス（“Place d'Italie”）で現実に存在することを知る（映画『5 時から 7 時までのクレオ』で主人公がその 21 番に乗る長い場面がある）。ロマンにも欠ける Voix et images だったが、耳に焼き付いていた音が突然蘇るという僥倖はいかにもロマネスクではあった。

クレディフの授業は全てフランス語でなされたので担当された日本人の先生方（朝倉先生、野村先生）には誠実な人柄の分だけ居心地の悪さが窺え、会話授業を担当されていた若手のドムナック夫妻のリラックスぶりと対照的であった。マダムなどはスカート姿で教室の机に座ることもありこちらは少しドキドキ。戦々恐々としたのはムッシューが発する Vous vous rasez combien de fois par semaine ? という代名動詞の問いである。童顔の私はそれまで髭を剃ったことが一度もなかった。その問いが実際に私にも向けられたかどうか思い出せないのは、男未満であることが露呈することを恐れるサスペンス状態の方が強烈だったからだと思う。

私が選んだ A クラスでは文法クラスもあった。その担当が当時教育テレビのフランス語講座に出ていた丸山圭三郎氏である。ブラウン管に映る端正な姿がそのまま生身で目の前にあることに不思議な感じがした。氏の授業は文法説明というよりパターンプラクティスが中心だったように記憶する。ずっと後に私がフランス語を教え始めたとき、当然のことながらいかに教えるかで悩んだ。関西在住の外語の先輩たちが中心となって開発したメソッドの影響も受けつつ、私が授業の組み立ての中心に据えたのはゲームである。各自に別々のカードを持たせ、足りない情報を対話により補完し合ういわゆるインフォメーション・ギャップ・ゲーム。これはパターンの定着と語彙力を増やすのに役立つはずだった。習うより慣れろの精神（クレディフの影響か）がパターンプラクティスに受肉した（文法は学ぶものではなく、発見し、身体化するもの）。この業界では「自分が習ったように教えてはならない」という金言があるが、パターンプラクティスは福井・丸山両氏の『フランス語練習問題―機能本位』の影響かと後年になって気づいた。「自分が習ったように教えてしまった」ことになる。

第 27 回仏友会総会のお知らせ

◆**日時**：2023 年 4 月 23 日（日）　14:00 ～ 17:30（予定）
14:00 ～総会　14:30 ～講演会　16:00 ～懇親会

◆**会場**：大手町サンケイプラザ 201・202 号室
（東京メトロ大手町　E1 出口）
コロナ対策緩和の流れを考慮し、オンライン参加は継続しつつも、会場参加を中心に開催いたします。
会場入場者は 40 名程を見込んでいます。

◆**講師**：川口裕司氏（1981/ 昭和 56）
東京外国語大学名誉教授

◆**演題**：「外語での 27 年間」

1995 年 4 月から 2023 年 3 月まで 27 年にわたり外語大に勤めてきました。その間には西ヶ原から府中への引っ越しがありました。また大学で大型プロジェクトを推進し、それが終わると大学執行部を務めたり、日本学術振興会で勤務したりしました。その間、研究との関係でパリ、イスタンブール、台北などを行き来しましたが、今回は、そうした紆余曲折の大学人生について、研究内容にはなるべく立ち入らず、主に街と知人たちを中心に、まったく個人的な感想をお話させていただきたいと思います。

◆**参加費**：会場＝ 6,000 円、オンライン (Zoom) ＝無料
会場では通信費 1,000 円 / 年も同時に受け付けます。

◆**申込〆切：4 月 14 日（金）**
仏友会にメルアド登録済の会員には改めてご案内いたします。その他の会員および会員未登録の方は下記アドレス宛てにメールでお申し込みください。

◆**申込先：山﨑るり子　ruche_blanche@yahoo.co.jp**

外語時代の彷徨 ―自己の軌跡の一面を振り返る

谷川多佳子（1972/ 昭 47）

1967 年の入学から大学院まで、外語での 7 年半はある意味で知的彷徨の時期だった。サルトルの友人ポール・ニザンの『アデン・アラビア』冒頭に、《J'avais vingt ans alors... je ne laisserai personne dire que c'est le plus bel âge de la vie.》という鮮烈な一文があったが、20 歳を挟んでの外語のこの時期は現在の知的活動の源だったかもしれない。

入学後、視聴覚方式 CREDIF の 30 人ほどの A クラスは、担任の朝倉先生と渡瀬先生を含めて、コンパをやったり、先生のお宅へ招かれたり、と楽しかった。だが 1 年後、大学「紛争」のバリケード、次いで 1 年半のロックアウトなど予想もしない状況の連続だった。 授業のない間、自分でさまざまな書物に接し、友人たちとサルトルやニザンを読んだり、医学や心理学へ進む友人たちとはフロイトの自我と集団心理を勉強した。外語の同級生たちの前衛的な演劇を見たり、言語学やロシア科の院生に誘われルソーの未邦訳の『言語起源論』を読んだりもした。私自身は主体性がなく、いつも誘われるまま素直に参加していたが、豊かな刺激があった。

自身の読書でフランス現代思想の「構造主義」が出てきた。当時外語のフランス人教師だったドムナック氏が授業で《L' existentialisme... est complètement démodé....》としばしば説明していた。高校時代から翻訳で読んでいたサルトルやボーヴォワール、カミュ、マルローといった「実存主義」の流れではなく、日本に紹介され始めた「構造主義」の知的世界は新鮮だった。それは数学、言語学、人類学、精神医学などの広範な学問領域にまたがり、特に文化人類学に惹かれた。フーコーやラカンも読み始めた。そうした中、外語大でやれる学問として言語学を考えた。当時丸山圭三郎氏の講義を 2 年間聴講でき、ソシュール言語学は構造主義のベースと思えて興味深かった。マルティネ系言語学の専門家であった渡瀬先生は入学以来 A クラスの担任だったこともあり、言語学へ気持ちが傾いた。関連の本を購入し勉強を始めたのだが、思想的あるいは文化的なものへの渇望のようなものが湧いてきて、卒論はルソーとレヴィ＝ストロースというテーマを考えた。だが、論文としての軸が見つからず、結局、デカルトにすれば軸ができ現代思想も繋げられる、と考えた。若きデカルトから始まり、時代的な考察も行い、当時読み始めたフーコーとデリダのデカルトについての論争を挿入した。相当たくさん文献を読んでがんばったが、次の方向が見出せないまま、大学院に入学した。

その頃、外語の先輩高坂正彦さんのお宅で、まだ未邦訳のフーコー『言葉と物』を読み、さらにその縁でヘーゲル哲学の専門家と『精神現象学』を読む機会に恵まれた。大学院の演習でそれぞれの先生方の学問的力を吸収しつつ、自分の研究テーマを考え、フランス政府給費留学生試験の準備を始めた。合格した先輩たちからは親身で有益なアドバイスをいただいた。

順調にフランスに留学し、1974 年～ 1979 年、デカルトについての博士論文を書くことになる。非常に厳しい学問的訓練の連続で、専門的な研究と論文の執筆に追われた。哲学の専門的な仕事をまとめることで精一杯の生活だった。

師のベラヴァル先生は大家で、プレイヤード版の『哲学の歴史』3 巻を監修したがその第 3 巻 (現代) で、60 ～ 70 年代のフランス思想について、「マルクス・フロイト・ニーチェのトリロジー」と言い表し、それほどにフロイトをはじめとする精神分析の影響はこの時期大きく、広く流行していた。美術史や歴史学などの分野に取り入れられ、哲学でも精神分析に関わる人がいた。ベラヴァル先生は、哲学の教師でソルボンヌのトップの教授であることに満たされず、その関心は多岐にわたり、詩人と数学者に憧れ、作家や芸術家、そしてラカンとの交流もあった。

先生の指導のもと、デカルトにライプニッツを加味した博士論文が仕上がり、日本に帰国後は哲学の教職を得て今日に至り、専門の 17 世紀哲学を中心に仕事をしてきた。

だが専門の哲学をはみ出てしまう仕事として、精神分析や狂気、美術史などに関わる仕事もあり、このたび刊行した『メランコリーの文化史』（講談社) もその流れになる。朝日新聞の藤生京子さんがこの本に関心を持ちインタビューに来てくださったが、2 時間にわたる会話のなかで私の知的歩みを遡ると、外語時代の話をずいぶん語ることになった。記事のまとめに「はみ出すものを探って」とあったが、専門の哲学をはみ出る関心と仕事の源泉は、外語時代の知的彷徨にあったように思われる。哲学分野では、A クラス同級の福島清紀さんとライプニッツの翻訳をご一緒し、彼は寛容論の書物を遺した。後輩の港道隆さんはジャック・デリダと親しく、フランス現代哲学で素晴らしい仕事をした著名な研究者であった。鬼籍に入られた 2 人の名を深い悲しみとともに記し、この拙文を閉じることにしたい。

第 100 回外語祭　フランス語劇「赤と黒」鑑賞記

花輪宗命（1970/ 昭 45）

昨年 11 月 23 日（水）、仏友会を代表して、金澤脩介副会長、同期会員の西田紀男氏とともに、外語祭恒例のフランス語劇の鑑賞・激励に伺いました。応援団には、寺田朗子東京外語会理事長も加わってくださったので、現役の後輩たちにノーベル賞級のエールを送ることができました。（＊語劇応援団写真参照）

当日はあいにくの雨模様でしたが、フランス語劇の公演は大変な人気で、開演の午後 1 時までには、プロメテウス・ホール前にファンの長蛇の列ができていました。それは、これまで毎年演じられてきたフランス語劇の意欲的な取り組みに対して、高い評価が定着していることを物語るものであり、OB の一人として誇らしく思いました。

今回の演目は、スタンダールの名作「赤と黒」でした。フランス文学に興味を持つ人なら誰でも知っている大作だけに、それをどのようにして 1 時間余りの舞台劇で演じるのだろうかと思うだけでも興味津々の公演でした。

それに加えて、今回の応援団のメンバーは、かつて東京外国語大学でフランス語を勉強していた頃、ジェラール・フィリップがジュリアン・ソレルを演じた映画が上映されていたので、生のフランス語に接する目的もあって映画館に足を運んだ経験がありました。何と金澤副会長は、その時の資料を今でも保存しておられ（この対訳シリーズは本棚で 55 年ほど惰眠をむさぼっていたらしいですが）、会場に持ってこられたのです！その映画の記憶を思い起こしながら、今回の語劇を鑑賞するのも楽しみの一つでした。

今回の「赤と黒」の語劇は、そうした期待に十分に応える熱演でした。才気と美しさを兼ね備えた、立身出世の野心を抱くジュリアン・ソレルの波乱万丈の生涯を、予想外の場面転換を見せた決定的な各段階に的を絞って再現する演出は、見事なものでした。流暢なフランス語を駆使した初々しい出演者はもとより、舞台全体を支えた裏方の学生さんたちの努力とチームワークにも思いを致すと、感激もひとしおでした。仏友会からのお祝い金も大変感謝されました。

今後も後輩たちの頑張りにより、この素晴らしい伝統が受け継がれることを切に希望します。

フランス科語劇「赤と黒」の出演者と仏友会応援団

岩崎力先生とユルスナール

山﨑るり子　(1977 / 昭 52)

定年退職をきっかけに放送大学に学士入学し、去年卒業論文を書く機会を得ました。誰について書くか考えているとき、在学中に「すごい人に出会った」と言って岩崎先生が紹介してくださった作家を思い出しました。それは、女性で初めてアカデミー・フランセーズの会員となったマルグリット・ユルスナールです。代表作は『ハドリアヌス帝の回想』、『黒の過程』ですが、私は初期の短編『東方綺譚』（1938 年）を研究対象に選びました。

この研究では、アマゾンや日本の図書館ばかりではなくフランス国立図書館の電子図書館 Gallica も利用しましたが、基本文献として不可欠であったのは、日本語に翻訳された作品を収めたユルスナール・セレクション全 6 巻（2001~2 年、白水社）でした。特に各巻末の「解題＝訳者あとがき」では、ユルスナールのことはもちろん、岩崎先生とユルスナールのかかわりも知ることができました。それによれば、最初の出会いは 1971 年 5 月パリ、ユルスナールがブリュージュを再訪した直後のことです。その時「ミケランジェロの聖母子像があの町のノートルダム寺院に収められたのは 15** 年のことだから、ゼノンも見ているはずです」と語るのを聞いたそうです。ゼノンは『黒の過程』の主人公ですが、ユルスナールはまるで実在の人物のように語っています（『黒の過程』解題）。また、1982 年秋、ユルスナールの日本滞在中に運転手兼ガイドとして地方への旅に同行したのは岩崎先生でした。伊勢神宮や広島平和記念資料館を訪れた時のユルスナールの印象を、「人目のないところでは涙の味を知りすぎるほど知っている人だろう」と語っています（『目を見開いて』解題）。

今回卒論の指導をしてくださった野崎歓先生は、留学中、当時パリ日本館の館長だった岩崎先生にお世話になったとのことでした。論文執筆の過程で、岩崎先生のユルスナールについてのお仕事に触れることができたことは、私には望外の喜びであり収穫でした。

外国人教師がつづる外語大の思い出（No.3）
Je me souviens de Gaigodai...

Didier Chiche

J'ai l'habitude de dire que je suis né deux fois : une fois à Paris et une seconde fois au Japon - plus précisément dans le Kansai, puisque c'est en qualité d'enseignant étranger à l'Université d'Osaka que j'ai entamé une carrière universitaire qui devait se dérouler presque entièrement au Japon. Après deux ans passés à Handai, je suis donc arrivé en 1982 à l'Université des Langues étrangères de Tôkyô (que l'on appelait Gaigodai ou plus simplement Gaigo), où j'ai exercé jusqu'à l'été 1985. J'étais encore un tout jeune professeur, puisque je n'avais derrière moi que deux ans d' expérience, et je ne saurais trop dire tout ce que je dois à cet établissement où j'ai passé trois années de bonheur. À la manière d'un Georges Perec, je pourrais entamer la litanie des Je me souviens : je me bornerai ici à faire revivre quelques-uns de mes souvenirs les plus chers….

Je me souviens d'abord du vieux quartier de Nishigahara, où se trouvait alors l'université : il y avait, entourant le campus, tout un enchevêtrement de rues étroites et labyrinthiques, de petites boutiques, de restaurants ou de bars dans lesquels parfois ne tenaient que quelques personnes. C'était un Tôkyô populaire et chaleureux, et où peut-être flottait encore – je me plaisais du moins à le croire – l'atmosphère de ce qu'avait été le vieil Edo. Je pouvais gagner l'université en prenant l'un des derniers tramways de la capitale, ou en traversant le cimetière de Somei où par endroits palpitait entre les tombes - comme aurait pu le dire Valéry ! - le feuillage des cerisiers.

Je me souviens de ces étudiants pleins d'enthousiasme qui m'avaient été confiés ; et ce qui me frappa d'abord, ce fut leur agilité intellectuelle, leur qualité humaine et leur volonté. Je fus étonné par la rapidité avec laquelle ils s'éveillaient aux divers aspects de la culture et de la langue françaises. Témoin de ces étonnants progrès : la fête de l'université, à l'occasion de laquelle des pièces de théâtre étaient montées et jouées en français par nos étudiants. Je me souviens du Médecin malgré lui de Molière, mis en scène et joué par une équipe passionnée et talentueuse, du Caligula de Camus - et aussi, dans un tout autre style, de Boeing-boeing, dont le comique boulevardier ne laissa personne indifférent !

Je pense aussi, bien sûr, avec gratitude, à ceux qui furent mes collègues et sont restés mes amis ; tous étaient des universitaires de haut niveau, versés dans les domaines les plus divers de la culture et de la langue françaises. Appelé à devenir moi-même traducteur littéraire, je me souviens d'échanges fructueux avec certains d'entre eux qui, pour avoir beaucoup traduit, savaient d'expérience combien une telle tâche peut être exigeante.

Autre atout : Gaigo était un établissement authentiquement pluridisciplinaire. Outre les cours de langue, il y avait de nombreux enseignements destinés à élargir les perspectives des étudiants, à leur montrer que découvrir les cultures étrangères, c'était aussi s'intéresser à des domaines complémentaires : ethnologie, histoire sociale, histoire de l'art. « Mes limites linguistiques sont les limites de ma vie », me dit un jour une étudiante. Un souvenir émouvant me reste en mémoire : au terme de mes trois ans à Gaigo, j'ai quitté Tôkyô pour les Etats-Unis. Le jour de mon départ, à Narita, j'eus la surprise de voir l'une de mes élèves de première année, venue exprès me dire au revoir.

Pour beaucoup de ceux qui ont été mes élèves, et avec qui j' ai conservé des liens, ces trois années à Gaigo auront été des années enrichissantes, et qui ont coloré à jamais un certain art de vivre. J'ajouterai une dernière chose, et qui en dit long : presque tous ceux qui, comme moi, ont enseigné à Gaigo, sont revenus au Japon. N'est-ce pas là un beau témoignage de gratitude ?

≪通信費納入ご協力のお願い≫

ゆうちょ銀行手数料（仏友会負担）節約のため、通信費（1000 円 / 年）の納入に際しては、できるだけ複数年度分をまとめて振り込んでいただきますようご協力をお願いいたします。詳しくは、会報に同封されている「通信費納入のお願い」をご覧ください。